

報告

保育カンファレンス研究の現状と今後の展望

阿南 寿美子* 島田 知和** 田中 洋***

<要 旨>

本論では、保育カンファレンス研究の現状を把握し、今後の展望を見出すことを目的とした。そのために、保育カンファレンスに関する先行研究について「保育カンファレンスがどのように行われているのか」を検討した。「CiNii」を用いて文献検索を行い、57本の論文を分析対象とした。分析の視点としては、「研究の目的」「保育カンファレンスの対象」「保育カンファレンスの参加者」「保育カンファレンスの資料」の4点を設定した。その結果、保育カンファレンスの参加者、用いられる資料の多様化が進んでいることが明らかとなった。今後の展望としては、第一にインフォーマルな保育カンファレンスの検討が必要であること、第二に園外も含めた多様な職種の人たちと協働した保育カンファレンスの検討が必要であることが提起された。

キーワード：保育カンファレンス、子ども理解、インフォーマルな保育カンファレンス、
「気になる」子ども、エピソード記録

I. はじめに

保育者は、常に一人ひとりの子どもの育ちに目を向け、同時にクラス集団としての育ちを意識しながら保育を行っている。そこでは子どもへ直接的は働きかけのみではなく、環境構成や生活の流れなどを含めてより適切な援助や支援が行えるように自身の保育を省察している。また、日々の振り返りに加えて、特定の子どものケース会議や保育内容についての園内研修を行うことによって、園全体での振り返りが行われている。このような保育の振り返り（保育カンファレンス）の重要性が、近年注目されている。柴崎・金¹⁾は保育実践記録には次の3つの視点-子どもの姿と保育者の思いを明日の保育への見通しでまとめる必要があること、また、自分らの保育を振り返り「省察」をすることは新たな保育実践への提案になること、新人保育者等の保育への自信をもたらすきっかけになることを指摘している。平山²⁾は、カンファレンスとは、保育の経験年数にとらわれず、参加者全員が自分の実践に引き寄せて考え、自分なりの見方や考え方を対等な立場で出し

あっていくものであり、そのことが自らを高め、園の保育の質を向上させるために、今求められている、と述べている。一方で、小方・片岡³⁾によると、保育カンファレンスの重要性は感じているものの、「自分の意見を言えない、主張できない」ことが保育カンファレンスに消極的になる大きな要因の一つであると述べられている。さらに施設全体として、一人ひとりの参加度合いを高める工夫やシステム作りを行うことの必要性を述べている。増田・石坂⁴⁾はざっくりばらんな雰囲気による保育者同士の談話や管理職である園長・主任によるこまめな助言・支援などの調整が戸惑いの解消に効果的だと述べている。黒澤⁵⁾は保育カンファレンスを通して保育者同士、専門職同士の相互に「支え合える」関係性を構築していくことの重要性を述べている。

保育カンファレンスで用いられる資料についても検討が行われており、資料を用いることで、個人の悩みや課題が全体で共有されるとともに、他者の視点が入ることによって多角的に状況を捉えることが可能になる。その一つとして、中坪⁶⁾は、ビデオを用いることで、保育者の積極性、複数の保育者によ

* 西南女学院大学短期大学部保育科

** 活水女子大学健康生活学部子ども学科

*** 智泉幼児保育専門学校

る多様な解釈の可能性や新たな発見を促すことにつながることを指摘している。

以上みてきたように、保育カンファレンスの重要性やその方法については細かく焦点化し実証されてきたが、保育カンファレンスそのものを網羅的にレビューしている研究は少ない。

そこで、本論では保育カンファレンス研究の現状を把握し、今後の展望を見出すことを目的とする。そのために、保育カンファレンスに関する先行研究について「保育カンファレンスがどのように行われているのか」を検討した。

II. 調査の方法

1. 文献検索と対象文献の選定方法

本研究で分析対象となる先行研究については、NII 学術情報ナビゲータ「CiNii」を用いて文献検索を行った。その際、検索キーワードは、「保育カンファレンス」および「保育カンファレンス」とし、年代制限を設定せずに行った。「保育カンファレンス」で検索した論文 139 本、「保育カンファレンス」で検索した論文 234 本のうち、「保育カンファレンス」で検索し重複したもの、学会抄録及び保育カンファレンスについての詳細が記載されていないものを除

外し、57 本の論文を分析対象とした。

2. 文献の分析の視点

保育カンファレンスに関する先行研究の分析の視点としては、「研究の目的」「保育カンファレンスの対象」「保育カンファレンスの参加者」「保育カンファレンスの資料」の 4 点を設定した。

「研究の目的」は、次の 4 項目に分類した。保育カンファレンスの構造や実施方法と、その課題について検討した「①保育カンファレンスの意義・課題の検討」、保育カンファレンスを実施することで保育者や保育の質にどのような変容を与えるか検討した「②保育の質向上における有効性の検討」、保育カンファレンスを用いて子どもの実態把握、保育方針・支援方針について検討した「③子どもの実態把握、保育（支援）方針の検討」、これらに含まれない「④その他」に分類した。

III. 結果と考察

1. 「研究の目的」と「保育カンファレンスの対象」

「研究の目的」ごとの保育カンファレンスの対象は表 1 に示したとおりである。

表 1. 「研究目的」ごとの「保育カンファレンスの対象」の分類

研究の目的	論文数	保育カンファレンスの対象	論文数
保育カンファレンスの意義、課題の検討	22	保育者	1
		子ども	9
		「気になる」子ども	9
		その他	3
保育の質向上における有効性の検討	22	保育者	0
		子ども	16
		「気になる」子ども	5
		その他	1
子どもの実態把握、保育（支援）方針の検討	6	保育者	0
		子ども	0
		「気になる」子ども	6
		その他	0
その他	7	保育者	1
		子ども	4
		「気になる」子ども	2
		その他	0

註) 「『気になる』子ども」には「障害のある子ども」「障害の疑いがある子ども」「特別な配慮が必要な子ども」が含まれる

「研究の目的」を分類した結果、保育カンファレンスの有効性や方法の検討などを調査した研究を「保育カンファレンスの意義・課題の検討」^{2), 7)~27)}、保育カンファレンスによる保育内容や保育方法の検討を調査した研究を「保育の質向上における有効性の検討」^{28)~49)}、子どもの発達の状況を理解し、援助（支援）に活かすために行われた保育カンファレンスを「子どもの実態把握、保育（支援）方針の検討」^{50)~55)}として分類した。これらに分類できなかった研究、例えば、大学院生と保育者による語り合いの効果などの研究を「その他」^{56)~62)}に分類した。

3つの分類の中では、「保育カンファレンスの意義・課題の検討」、「保育の質向上における有効性の検討」が多くみられており、1990年代から始まる我が国の保育カンファレンスに関する研究では、この2点の「研究の目的」を中心に多くの知見が積み重ねられてきたといえる。特に、本研究で抽出した論文を年代順に置き換えたとき、2000年代前半までは「保育カンファレンスの意義・目的」に関連する研究が多くなされており、その後、「保育の質向上における有効性の検討」がなされるようになってきたことが分かった。これは、平山²⁾が述べているような保育カンファレンスの特質が、保育の質や保育者の資質向上において有効だと認識されているためだと考えられる。さらに2008年の保育所保育指針改定において「保育者の資質向上」の内容が具体的に示されたことにより、園内外の研修を通して保育者の専門性を高めることがより求められるようになったことも、本結果の背景として推察される。これらの「研究の目的」による保育カンファレンスの対象は、「気になる」子どもや保育者が保育記録をとる中で出てきたクラスの子ども、遊びの場面で抽出された子どもなど多様であった。なかでも先述したように、「保育カンファレンスの意義・目的」の初期の研究では、「気になる」子どもを対象として保育カンファレンスが行われていた。

「子どもの実態把握、保育（支援）方針の検討」を研究の目的としている先行研究の全てが「気になる」子どもを対象としていることが明らかとなった。障害のある子どもや特別な配慮が必要な子どもなどの「気になる」子どもの保育では、保育カンファレンスを行うことによる多様な視点が一層重要となる。一方で、ここでは「気になる」子ども以外の子どもを対象とした保育カンファレンス研究はみられなかった。子どもの実態把握は保育の原点とな

るもので、保育カンファレンスを行うことで得られる新たな気づきは、どの子どもの保育においても次の保育を展開していくための大変貴重な手がかりとなる。「気になる」子どもを対象とした保育カンファレンスに加えて、日常の保育の中でも一人ひとりの子どもを理解する保育カンファレンスのあり方が検討される必要があるのではないだろうか。

2. 保育カンファレンスの参加者

保育カンファレンスの参加者については表2に示したとおりである。

表2. 保育カンファレンスにおける参加者

参加者	論文数
保育者	51
園長・副園長	29
養護教諭	15
大学教員・研究者	32
学生・大学院生	15
その他	9
記載なし・不明	5

参加者の傾向として保育者に続いて、大学教員、園長・副園長などの管理職、保育・幼児教育を専門的に学ぶ大学生、大学院生、幼稚園であれば養護教諭の参加が多いことが明らかとなった。保育の経験年数の異なる参加者や、保育者だけではなく職場内の他職種または外部の専門職など多様な立場による保育カンファレンスが有効だと考えられていることが分かった。その他の参加者は巡回相談の臨床心理士や看護師といった外部の参加者であった。保育カンファレンスでは、他者と考えを出しあう中で異なる視点を持つことができ、その結果、新しい発見につながっている。最近の研究では、保育実践現場と保育者養成校の協働も行われるようになってきている。このように園外の参加者として、今後は例えば行事などの保育内容について検討する際には、保護者の参加を促すなど、保育カンファレンスの主題や目的に応じた参加者を検討することが求められる。また若林²⁷⁾は、参加者の役割にも注目している。話題提供をする保育者は問題が明確化することが困難なこともあるため、メンターやファシリテーターなどの進行係が保育者の「気づき」を引き出し、保育実践につながると述べている。先行研究には、他

にも大学教員・研究者が進行係として参加しているものがあり、園内の職員以外の参加や協働が保育者の新たな気づきに良い影響を与えていることが指摘された。^{8), 9), 10), 25), 34), 35), 42), 44), 58), 62)}

3. 保育カンファレンスの資料

保育カンファレンスで用いられた資料については表3に示したとおりである。

表3. 保育カンファレンスに用いられた資料

資料	論文数
エピソード記録	17
映像記録（ビデオ）	17
保育記録	9
語り（資料なし）	7
その他	20

保育カンファレンスの資料には、子どもたちの遊びや生活の様子を記述したエピソード記録やビデオカメラ等で撮影した映像記録が多いことが明らかとなった。これらの資料の特徴として、普段から作成している保育記録から抽出したものや、一定の目的や意図を持って記録したものがあつた。また、少数ではあるが映像記録の中には市販の映像記録が使用されていた。また、その他の資料では、指導計画の週日案を用いている保育カンファレンスもみられた。

資料の準備については、保育者だけでなく大学教員や大学院生などの外部の参加者が行なっている先行研究もみられた。^{23), 25), 41), 46), 54), 60), 62)} 保育カンファレンスの中で大学側が準備した資料を用いる際は、研究者や大学院生が必要だと思われる箇所を示すなどの方法で情報の提供を行っていた。

一方で、文字資料や映像資料を用いずに保育者等の「語り」のみで行っている保育カンファレンスもあつた。^{17), 18), 27), 28), 29), 39), 57)} 日常の保育で困っていることや悩んでいることを自由に語り合うことで、自分の保育に自信を持てるようになったり、保育者自身も気づいていなかった問題が明確になり新たな気づきを得られたりといったような成果をあげた先行研究もみられた。

以上のことから、保育カンファレンスの参加者と同様に、用いる資料も多様化が進んでおり、エピソード記録や映像記録、もしくは「語り」など目的に応じて使い分けられていることが明らかとなった。映

像記録では、保育者が撮影するための機器を所持した状態で保育することとなり、さらに、撮影する場面を選択し、保育カンファレンスで使用する場面を抽出する作業も必要となる。しかしながら、保育者の主観でとらえられることが多い文字記録よりも映像を共有することによって参加者の理解が深められるといった利点もある。多忙な保育現場の実情を鑑みて、どのような資料を用いることが適切であるのかを検討する必要があるのではないだろうか。

IV. おわりに

保育カンファレンス実践と研究の今後の展望を以下の2点にまとめる。

第一に、インフォーマルな保育カンファレンスの検討である。保育カンファレンスが保育の質向上、保育者の資質向上に一定の効果があることは、これまでの先行研究からも明らかとなっており、様々な知見が蓄積されている。保育カンファレンスの有効性について認識されている今日においても保育現場は多忙であり、職員が集まる時間の確保や保育カンファレンスの資料を準備する難しさから実施できない園も多い。そこで午睡の時間などの空いた時間を活用し、養護教諭や栄養士も含めた参加可能な職員で、保育者の「語り」を始めとした、負担が少なく継続して準備ができる資料を用いたインフォーマルな保育カンファレンスの検討が必要だと考える。保育カンファレンスは自らの保育を振り返り、話し合う中で今後の改善につなげていくことが基本である。しかしながら、必ず保育の質の向上・保育者の資質向上につながらなければいけないという考えにとらわれてしまうと、保育カンファレンスは「成果が求められる特別な話し合い」になってしまう可能性は否めない。これからの保育カンファレンスでは、多様な視点で語られることによって子ども理解が深まり、得られた子ども理解によって「保育のおもしろさ」に保育者が気づき、結果として保育の改善につなげていけるよう、立場や保育の経験年数を超えて語り合えるような保育カンファレンスの検討も必要ではないだろうか。

第二に、園内だけでなく園外も含めた多様な職種の人たちと協働した保育カンファレンスの検討である。園外の多様な職種には、大学教員、各自治体の巡回相談員、保健師、臨床心理士などの専門職、さ

らには他園の保育者や保護者も対象になる。本論が対象とした先行研究では、大学教員・研究者など園外から参加し、ファシリテーターやメンターなどの役割を担う保育カンファレンス、大学教員や学生が作成したフィールドノーツなどを資料として使用した保育カンファレンス、他園と協同して実施した保育カンファレンスなども報告されている。松本ら^{36), 42), 58)}は、保育カンファレンスの外部公開、大野ら⁶²⁾は、大学院生が語り手となる保育カンファレンスを実施していることから、今後は外部からの参加・協力を促すことで、日常の保育では気づけない新たな視点が発見できることが期待される。

引用・参考文献

- 1) 柴崎正行・金志 (2011) 日本における新人保育者の育成に関する最近の動向, 大妻女子大学家政系研究紀要 47 巻 pp.39-46
- 2) 平山園子 (1995) 保育カンファレンスの有効性, 保育研究 16 (3) pp.18-29
- 3) 小方朋子・片岡今日子 (2022) 就学前施設における園内研修の実態と意識 - 質問紙調査より, 香川大学教育学部研究報告 5 pp.29-40
- 4) 増田貴人・石坂千雪 (2013) 「気になる子」への保育援助をめぐる保育者の認識や戸惑い, 弘前大学教育学部紀要 第 110 号 pp.117-122
- 5) 黒澤祐介 (2012) 保育における拡大された同僚性の検討, 大谷学報 92 号 (1) pp.72-82
- 6) 中坪史典 (2010) 保育・幼児教育の分野における映像実践の最前線 - 子ども社会研究における映像の可能性 -, 子ども社会研究 16 号 pp.89-100
- 7) 荒木照子・小山智子・丸山佳代・溝上ゆかり・角志津子・村岡美津子 (2009) 他者と交わろうとする幼児への保育行為についての考察 (その 1) - R 児の事例から -, 岐阜聖徳学園大学教育実践科学研究センター紀要 (9) pp.185-194
- 8) 松井剛太・七木田敦 (2005) 統合保育における保育カンファレンスの方法とその効果 - グループインタビュー法を用いた障害児の個別支援計画作成に関して -, 小児保健研究 64 (3) pp.469-475
- 9) 松井剛太 (2007) 発達障害のある幼児の理解と支援を促す保育カンファレンス - フォーカス・グループ・インタビュー (FGI) の実施から -, 発達障害研究 第 29 巻第 3 号 pp.185-192
- 10) 松井剛太 (2009) 保育カンファレンスにおける保育実践の再構成 - チェンジエージェントの役割と保育カンファレンスの構造 -, 保育学研究 第 47 巻第 1 号 pp.12-21
- 11) 七木田敦・米神博子・林よし恵・道下真穂・松本信吾・菅田直江・正田るり子・天満弘美・松井剛太 (2004) 幼稚園における統合保育の実践と保育カンファレンスの融合, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要 pp.79-89
- 12) 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・箕輪潤子・安見克夫 (2012) 保育カンファレンスにおける談話スタイルとその規定要因, 保育学研究 第 50 巻第 1 号 pp.29-40
- 13) 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・安見克夫・砂上史子・箕輪潤子 (2014) 保育者はどのような保育カンファレンスが自己の専門的成長に繋がると捉えているのか, 乳幼児教育学研究 (23) pp.1-11
- 14) 成田泉・関理恵・澤田美佳・水内豊和 (2017) 障害のある子どもの保育カンファレンスに関する研究 - 保育カンファレンスと保育実践の循環に着目して -, pp.33-44
- 15) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・松本信吾・林よし恵 (2009) 「エピソード記述」による保育実践の省察 - 保育の質を高めるための実践的記録と保育カンファレンスの検討 - 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 37 号 pp.229-237
- 16) 岡花祈一郎・杉村伸一郎・財満由美子・林よし恵・松本信吾・上松由美子・落合さゆり・武内裕明・山元隆春 (2010) 「エピソード記述」を用いた保育カンファレンスに関する研究, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 38 号 pp.131-136
- 17) 原孝成 (2014) インシデント・プロセス法による保育カンファレンスが新任保育士の専門的発達に及ぼす影響, 鎌倉女子大学紀要第 21 号 pp.43-54
- 18) 長谷範子 (2018) 新任期の保育者の育ちを支える保育カンファレンスの検討 - 保育場面の捉え直しと子ども理解・他者理解と自己理解 -, 臨床人間関係論研究 pp.164-172
- 19) 平松美由紀 (2011) 幼児理解を深めるためのカンファレンスの検討 - 保育実践の一場面のカンファレンスの省察から -, 中国学園紀要第 10 巻 pp.163-167
- 20) 小森谷 朗・香宗我部琢 (2019) カリキュラム・マネジメントにおける保育カンファレンスの意義: 複線径路・等至性モデリングを用いた保育カンファレンスの可能性と限界, 宮城教育大学教員キャリア研究機構研究紀要 1 pp.97-103
- 21) 香宗我部琢 (2014) 複線径路・等至性モデルを用いた保育カンファレンスの提案 - 保育者が感情共有プロセスとそのストラテジーに着目して -, 宮城教育大学紀要第 48 巻

- pp.159-166
- 22) 香宗我部琢 (2015) 保育者の時間的展望の共有化と保育カンファレンス—複線径路・等至性アプローチを用いた保育カンファレンス, 宮城教育大学紀要 pp.153-160
- 23) 久原有貴・七木田敦・大野歩・松本信吾・林よし恵・田中恵子・関口道彦・落合さゆり, (研究協力者) 金子嘉秀 (2012) 発達に課題のある幼児の集団への適応に関する実践的研究 (2) —年中児クラスにおける個別指導と園内カンファレンスを通して—, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 40 号 pp.47-52
- 24) 境愛一郎・中坪史典 (2017) 保育カンファレンスで複線径路・等至性モデリング (TEM) を活用することの意義と課題～若手保育者へのアンケート調査から～, 宮城学院女子大学発達科学研究 pp.21-32
- 25) 田中浩司・田丸尚美・高月教恵・高橋実 (2010) 幼稚園における特別支援教育に関する研究—保育カンファレンスを中心とした支援事例の検討—, 福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報 (7) pp.29-35
- 26) 田中美保子・榎田正子・吉岡晶子・伊集院理子・上坂元絵里・高橋陽子・尾形節子・田中都慈子・田代和美 (1996) 保育カンファレンスの検討—第 1 部 現場の立場から考える—第 2 部 研究者の立場から考える—, 保育学研究 34(1) pp.34-42
- 27) 若林紀乃 (2004) 保育カンファレンスにおける進行係のあり方—カンファレンスでの主任保育士の会話に注目して—, 幼年教育研究年報第 26 巻 pp.77-83
- 28) 濱田祥子・島本好子・辻明妃・菅原知恵子 (2021) SICS による「私たちの保育実践あるある」の振り返り—他園の保育者との保育カンファレンスを通して—, 比治山大学紀要第 27 号 pp.165-175
- 29) 河崎美香・石倉卓子 (2017) 保育者の「気になる」幼児の理解と援助に関する研究—巡回相談カンファレンスにおける逐語記録から—, 富山国際大学子ども育成学部紀要第 9 巻第 1 号 pp.23-33
- 30) 君岡智央 (2017) 友だちと協同して遊ぶようになるための環境・援助を探る—共通の目的に向かって取り組む 5 歳児の活動に焦点をあてて—, 広島大学附属三原学校園研究紀要第 7 集 pp.27-34
- 31) 小松和佳 (2019) 保育カンファレンスにおける保育者の専門性向上に関する研究—保育者同士の言葉の相互共有に着目して—, 広島大学大学院教育学研究科紀要第一部第 68 号 pp.21-30
- 32) 工藤ゆかり (2015) 質の高い幼児期の学校教育の実践に向けて—保育カンファレンスを通して—, 帯広大谷短期大学紀要第 52 号 pp.1-10
- 33) 松井剛太・浦野陽子・川田美保・土居恭子・武田真由・國方栄美子 (2022) 子どもの声をもとにした保育カンファレンスの検討, 香川大学教育実践総合研究 44 号 pp.25-30
- 34) 松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・林よし恵・日切慶子・正田るり子・藤橋智子, (研究協力者) 中西さやか・境愛一郎・刘原靖璇 (2012) 保育カンファレンスの外部公開は内部の保育者に何をもたらすのか, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 40 号 pp.177-182
- 35) 松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・金岡美幸・日切慶子, (研究協力者) 境愛一郎・刘原靖璇・保木井啓史・濱名潔 (2013) 保育カンファレンスの外部公開は他園からの参加者に何をもたらすのか, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 41 巻 pp.133-140
- 36) 三山岳・五十嵐元子 (2020) 日常の保育カンファレンスにみられる学びの構造, 保育学研究第 58 巻第 2-3 号合併号 pp.131-142
- 37) 三好伸子・宍戸良子 (2018) 保育カンファレンスにおける対話的解釈を育むための基礎条件—ラーニング・ストーリー学習後の学生と保育者の語りより—甲南女子大学研究紀要第 54 号人間科学編 pp.99-113
- 38) 溝口綾子 (2006) 保育カンファレンスにおける保育者の課題意識の検討—保育実践での「援助」を探る—, 帝京短期大学研究紀要委員会編 (14) pp.13-21
- 39) 溝口綾子 (2009) 新任保育者の保育実践における課題意識と省察に関する研究—保育カンファレンスの分析を通して—, 教材学研究第 20 巻 pp.235-244
- 40) 向井美穂 (2017) 保育所の巡回相談において「対話」が果たす役割—保育者の子ども理解を支える巡回相談機能の検討—, 十文字学園女子大学紀要 48 (1) pp.33-42
- 41) 中坪史典・上松由美子・朴恩美・山元隆春・財満由美子・林よしえ・松本信吾・落合さゆり (2010) 遊びの質を高めるための保育者の援助に関する研究—幼児の「夢中度」に着目した保育カンファレンスの検討—, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第 38 号 pp.105-110
- 42) 中西さやか・境愛一郎・中坪史典 (2013) 子どもの「今, ここ」という視点は保育者に何をもたらすのか—保育カンファレンスでの議論に着目して—, 幼年教育研究年報第 35 巻 pp.45-51
- 43) 中山美充子 (2017) 道徳性の芽生えを育むための環境・援助のあり方を探る—同年齢・異年齢とかわる 4 歳児の姿を通して—, 広島大学附属三原学校園研究紀要第 7 集 pp.19-26
- 44) 小田礼子 (2010) 保育者の資質向上のためのカンファレンスについての—考察—実践者の「気づき」を中心に—, 北

- 陸学院大学・北陸学院大学短期大学部研究紀要第3号 pp.111-121
- 45) 大須賀隆子 (2014) 3歳未満児の描画を通じた保育カンファレンス (I) -「五感を通じた経験を吸収した身体運動の軌跡」をめぐって-, 人間文化創成科学論叢第16巻 pp.117-125
- 46) 佐藤智恵・七木田敦 (2009) 保育室の環境構成が幼児の活動に与える影響-気になる子のカンファレンスより-, 幼年教育研究年報第31巻 pp.97-101
- 47) 利根川智子・和田明人・音山若穂・上村裕樹 (2014) 継続的カンファレンスで対話を重ねることによる保育者の意識の変化, 会津大学短期大学研究紀要第71号 pp.1-28
- 48) 上林千秋・浅田真由美・渡辺俊 (2005) 保育者の意識の変容がもたらす保育の質的向上-保育カンファレンスを通じた保育者の意識の変容に視点を当てて-, 群馬大学教育実践研究 22pp.265-281
- 49) 矢萩恭子 (2006) 幼稚園における保育の質と評価の問題-ビデオカンファレンスによる園内研修から考える-, 聖徳大学紀要編集委員会編 (17) pp.71-78
- 50) 芦澤清音 (2010) 発達臨床の専門性は保育カンファレンスで保育者をどのように支援するか-保育園の“気になる子”の事例検討会の分析-, 帝京大学文学部教育学科紀要 35 pp.25-35
- 51) 長谷川かおり, 丸尾晶子・木村公美・山本祐子・竹内範子・上野由利子・玉村公二彦・越野和之・岩坂英美巳・宮崎瑠璃子 (2011) 特別な配慮を必要とする幼児の教育的支援 (その3) -集団活動場面で自己調整的な行動の困難がめだつた幼児への支援-, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要 20 巻 pp.259-266
- 52) 守巧 (2012) 多動・衝動性が強いA児の事例からみた幼稚園における担任への支援体制の構築, 東京福祉大学・大学院紀要第2巻第2号 pp.151-160
- 53) 七木田敦・山崎晃・鳥光美緒子・縫部義憲・米神博子・林よし恵・道下真穂・松本信吾・正田るり子・菅田直江・岡本朱花・水内豊和・松井剛太 (2003) コミュニケーションに課題のある幼児の人間関係の構築に関する研究-保育カンファレンスと指導とを繋ぐ実践-, 広島大学学部・附属学校共同研究紀要第31号 pp.303-312
- 54) 佐藤智恵 (2015) 保育園における気になる子を対象とした保育カンファレンス-保育目標を明確にする実践の取り組み-, 福祉臨床学科紀要 12pp.47-54
- 55) 竹内範子・上野由利子・前田喜四雄・玉村公二彦・越野和之 (2009) 特別な配慮を必要とする幼児の教育的支援, 奈良教育大学教育実践総合センター研究紀要第18巻 pp.157-163
- 56) 阿部美穂子 (2013) 気になる子どもの保育における効果的な巡回相談スタイルの実践的検討-保育所 (園) 長アンケートの分析-, 人間発達科学部紀要第7巻第2号 pp.41-53
- 57) 長谷範子 (2017) 保育実践現場と保育者養成の共働の試み-新任保育者の育ちを支えるために-, 四天王寺大学紀要第63号 pp.277-288
- 58) 松本信吾・中坪史典・杉村伸一郎・金岡美幸・久原有貴・堀奈美・小嶋治鈴・関口道彦・正田るり子・田中恵子・玉木美和, (研究協力者) 境愛一郎・保木井啓史・濱名潔 (2014) 保育カンファレンスの外部公開は他園に何を発信しうるか-附属幼稚園を中核とした地域の研修ネットワーク構築の可能性の検討-, 広島大学学部・附属学校共同研究機構研究紀要第42号 pp.183-190
- 59) 中坪史典・秋田喜代美・増田時枝・安見克夫・砂上史子・箕輪潤子 (2010) 保育カンファレンスにおける保育者の話りの特徴-保育者の感情の認識と表出を中心に-, 乳幼児教育学研究 (19) pp.1-10
- 60) 七木田敦・林よし恵・松本信吾・久原有貴・日切慶子・藤橋智子・正田るり子・菅田直江・田中恵子・落合さゆり・真鍋健・金子嘉秀 (2011) 発達に課題のある幼児の幼稚園適応に関する実践的研究-適応過程とその関連要因の検討を中心に-
- 61) 西隆太郎・今里有紀子・光井麻里・水本貴子 (2011) 心理臨床学的観点からの保育カンファレンスの試み, ノートルダム清心女子大学紀要 35 (1) pp.82-90
- 62) 大野歩・佐藤智恵・田中沙織・飯野祐樹・真鍋健 (2009) 幼稚園における保育者と大学院生の保育カンファレンスに関する研究, 幼年教育研究年報第31巻 pp.123-130

Present Situation and Future Prospects of Early Childhood Education Conference Research

Sumiko Anami *, Tomokazu Shimada **, Hiroshi Tanaka ***

< Abstract >

The purpose of this paper was to understand the present situation of early childhood education conference research and to find future prospects. To this end, we examined previous research on childcare conferences to determine how childcare conferences are conducted. A literature search was conducted using CiNii, and 57 articles were selected for analysis. The four points of view for analysis were “purpose of the study,” “subjects of childcare conferences,” “participants in childcare conferences,” and “materials used for conferences”. As a result, it became clear that the number of participants in childcare conferences and the materials used for these conferences were diversifying. As for future prospects, firstly, it is necessary to consider informal childcare conferences, and secondly, it is necessary to consider childcare conferences in collaboration with people from various occupations, including those outside kindergartens and nursery schools.

Keywords: childcare conferences, understanding children, informal childcare conferences
children with special needs, episodic records

* Department of Early Childhood Education and Care, Seinan Jo Gakuin University Junior College
** Department of Child Development and Education, Kwassui Woman's University
*** Chisen childcare professional school